

## 送る言葉（小言）

下川 雅嗣

下川ゼミも今年で7年目となる。来年度は4月から1年間のサバティカルのため、この7年間で一区切りと言えよう。この7年間で振り返ると概ね楽しい思い出が多いし、皆さんとの関わりを通して多くのことを学ばせていただいた。しかしながら、一点だけこの7年間で次第に気になりつつある一つの問題がある。この問題は、今年のゼミでしばしば取り上げた『新自由主義』の問題とも通じるので、ここで少し書きたいと思う。また、この話は、これからの日本社会を創っていく若い皆さんに大切にしたいことなので、これを最後のメッセージにしたいと思う。

何が気になっているかというと、ゼミの中での雰囲気、以前に比べるとより一層個人主義的に、また主体的ではなく受動的になってきていることである。毎年、このゼミの最初に、ゼミを単に個人的な学ぶ場としてだけ考えるのではなくコミュニティ作りの場だと捉えているし、またゼミ生の主体性を大切にしたい旨を伝え、その趣旨に賛同している人に参加してほしいと話してきた。しかしながら、これに対する反応が鈍くなりコミュニティ性が次第に薄くなってきているように思うのである。実際に、以前は、ゼミの中でグループを作って共同研究を行ったりすることもあったし、ゼミ生主体となってゼミ後に毎週服を着替えて皆（希望者）で迎賓館を一周ランニングするような年、また2週に一度参加できる人みんなと一緒に夕食をとるようなこともあった。夏合宿や卒業合宿がゼミ生有志の発案で計画され、多くの人に参加するようなこともあった。一番印象に残っていることは、東京から箱根まで箱根駅伝にならって、自転車を漕にして、自転車を順に乗り継ぎながら往復したことであろう（なおその時には、私は箱根から小田原までの6区山下りの区間約20Kを走らされた）。このようなことが次第に減ってきているのである。

これらの変化は、実は、たまたまその年に集まった人たちの雰囲気の違いではなく今の新自由主義的な方向に変化している社会の雰囲気が影響しているのではないかと考えている。新自由主義とは、簡単に言うと市場のメカニズムに根本的な信頼を置き「小さな政府」をめざした「市場至上主義」である。「小さな政府」、すなわち人々の生存権とかそういったようなものに対する国家の責任を放棄して、福祉国家を解体し、あとは市場と民間、または場合によってはNGOとか市民、個人の自助努力に全てを丸投げするといったものである。ここで、先の述べた個人主義化の傾向とこの新自由主義がどんな関係を持つかということであるが、もともとこの新自由主義は、（西歐的）個人主義との親和性が高いのである。ここでの自由は個人の自由であると言われている（実際は、富裕層の自由であるし、企業活動の自由であると思われるが・・・）し、国家や共同体の役割が重視されなくなるのである。また新自由主義的政策を取ることによっての国家の人々の生存権への責任を放棄する口実として、今社会に浸透させられつつある、個人の自己責任、自助努力、自立支援という言葉は、私に言わせれば、悪しき個人主義のキーワードである。本来ならば国民の最

低限の生活は、セイフティーネットによって国家が最終的な責任をとらなければならないのに、それを放棄して個人の努力に任せます、ということの表れであろう。すなわちどこまでいっても頑張りなさいという雰囲気があり、それが意図的に創出されているように思う。そうすると、実際に貧困に陥った人や社会的に排除されてしまった人たちにとって、その主たる原因が政府の新自由主義的な政策であり、その結果の社会構造であったとしても、そうではなくてまるで個人の努力不足や、個人の自己責任に帰するという流れが生まれてくるわけである。実際に私が接する多くの野宿者の方々も「自分がいけなかったからこうなったんだ」と言う人が多い。その人なりの精一杯の努力をしたに違いないのに、まだまだ努力が足りないと思込まされて、自分が駄目だったからと思うようになっていくわけである。

この社会の問題を自分個人の問題に帰する傾向は、今の日本人に一般的な、内向的で、受動的な性格とも関係していると思う。これがもともとのものか、近年の教育によってそのようなのかは定かではないが、長い期間の学校教育において、「今の社会システムに素直に順応するのが良いことである、そうでない人はその人が問題である」というような方向で教育されていることは間違いないと思う。このことがいかに日本で特殊なことであるかについて話をしてみよう。1990年頃までは日本は、先進国(OECD諸国)の中で貧富の格差が一番少ない国だったが、新自由主義的政策によって、今では一挙に二番目に大きい国となったのである(アメリカが第一位)。また、貧富の格差を表す係数としてジニ係数(0から1までの指数で、まったく平等だと0で、一人の人がすべての富を持っている場合は1となる)が有名であるが、日本では1985年以降現在に至るまで急激にジニ係数が上昇しており、1980年に0.35だったのが2007年には0.5を突破した。このジニ係数は、これまでは普通な状態では、0.3前後に落ち着き、0.4を越えるとかかなり多くの人が格差をきつと感じだすと言われ、0.5を超えると社会不安が募って暴動がおき始める状態で、特段の事情がない限りこれを是正する必要があると言われていた。日本では一挙にその0.5を突破というようなところまで増えてきているわけである。それにも関わらず、日本では暴動どころかほとんど抗議行動さえ起きないのは他の国々と比較したら特殊なことであると言えるし、上述したような社会問題を個人の問題に帰する傾向の強さから来ているのではないかと思う。なお、そのような状態を解決するためには、二つの方法があると言われている。一つの方法は根本問題を解消すること、要するに貧富の格差がこれ以上広がらないような政策や構造変革を行って、ジニ係数を下げれば良いのである。それに対してもう一つの方法は、力で社会不安や暴動の芽を潰すということである。すなわち格差の拡大によって社会不安が高まり、暴動の危険性が生じても、起こさせないように物理的に治安を強化し、またメンタル的にも、人々に対して、「国家の強さ」(愛国心)や「国家・公共の利益」が大事だという社会的な雰囲気をつくり、「我慢しなさい」と押さえ込むのである。基本的にはこの二つの方法しかないはずであるが、すでに日本の場合は後者を選びだしたようであるし、かなり昔からの学校教育はそのような傾向を持っていたのだと思う。そして最近、

心の悩みを持った人、鬱の人が急に増えているし、その究極形である自殺者も年間三万人を超えるようになってきている。すでに日本では、潜在的には暴動が起こるほどの社会不安のレベルにあるにも関わらず、それが暴動という形で外に現われずに、自分の心を押しつぶして自殺するという内側に向かっているのかもしれないと思う。

以上話が一部いろんな方向にずれた感もあるが、個人主義的傾向が強まることと新自由主義は密接な関係があると思われる。もともと近代化のプロセスの中でコミュニティセンスが失われ、個人主義化の道を歩むのは一般的であるが、これがこの数年で一挙に進展したように思い、これがゼミにも目に見える形で現れているように思うのである。新自由主義の説明を最初の方で簡単に行ったが、人間関係、社会関係の観点から新自由主義の本質を論じた場合は、その本質は、「分断」と「排除」であるとも言われている。個人をバラバラに分断し、大企業や富裕層、勝ち組が利用しやすいようなシステムや社会雰囲気を作っていくのである。また、市場で価値がないと判断された人や組織は、存在自体が社会の負担になるということで、社会的に「排除」されていくのである。そのように考えると、新自由主義に対峙していくためには、共同性とコミュニティづくりのセンス、連帯性を、いろんな領域や場所、レベルで復活させていくことが根本的に重要であると考えられる。でないと、日本の社会は新自由主義に飲み込まれて、一部の勝ち組、その中でも余裕を持った人以外は、とても生き辛い社会になり、その行き着く先は社会の崩壊であるように思う。

このようなことで、ゼミでもコミュニティづくりをやりたいわけだが、それが皆さんに果たして伝わったのかどうかは疑問である。もし伝わらなかったのであれば、ここで再度これをメッセージとして皆さんに送りたい次第である。皆さんはこれからいろんな新しい場に行くと思う。どこに行っても社会構造が内包する「悪」に接しなければならぬし、それにある程度飲み込まれるようなことも多いだろう。しかしながら、どんな場に居たとしても、その場で自分のできる範囲で「分断」と「排除」に抗していくこと、いろんな領域（例えば、家族、近所、地域、会社等）でコミュニティづくりをしていくこと、そして「排除」されている人、「排除」されかかっている人と少しでも接しつながらを持っていくことをやっていくことによって、新自由主義の悪しき悪影響を少しでも減らし、日本社会を少しでも住み良い、生き生きとしたものに変えていってくださればと思う次第である。